

敬老の日

校 長 武井 正明

昔は15日が固定で敬老の日でした。9月の吉中学校だよりで義母のことを書きました。義母は時々、思い詰めたように2階に来て、

「いろいろ考えたのだけれど、やっぱり皆さんにご迷惑をお掛けするから施設に行かせてください」と言うことがある。こないだも、朝の出掛けに言いに2階に上がって来た。

私たち娘夫婦ではどうしても埋まらない不安や孤独が、義母の中に常に胸のどこかにあるのかもしれない。それが沸き上がるともう、どうにも抑えが効かないのだろう。

今夏、私は初めて爺さんという立場になった。

例えば自分が遠い将来、ひとりで娘夫婦のご厄介になったとしよう。でも自分のことが出来るうちは、同居は遠慮するかもしれない。

このご時勢に同居してくれるなんて感謝しかない。娘夫婦は、多分何かと気に掛けて優しくしてくれるだろうと思う。でもその気遣いが苦しい時だって、きっとある。

もう老い先短い余生で、静かに暮らせればいいとだけ願うのならば、娘たちに余計な心配を掛けずに、施設でのんびり暮らそうという思いも、私には理解できるのだ。

なんで吉中生が読む本欄に、校長はこんなことを書くのか…。

それは君たちが、もう中学生だから書くのです。子どもではないから書くのです。敬老の日とは、ただプレゼントを贈ればいい日だと私は思っていない。

こういう話を、親はいつも「大人の話」にしがちです。子どもたちに「余計な心配」を掛けたくないからです。子どもの意見を訊くことは、まずありません。

でもそうでしょうか。私は「必要な話」だと思います。そうやって大人が「触れてはいけないこと」として話題にするのを避けるから、いつまで経っても子どもは大人にならないのではないのでしょうか。家計の話も同様です。お金を稼ぐことがどれほど大変かを知らない子どもは金は「言えば出てくるもの」だと思って育ちます。わずか2泊3日、小遣いを含めれば10万近くする修学旅行費にしても、親は簡単に出しているのではないのです。

家族の問題は、年齢関係なく家族みんなで話し合うべきだと思います。

吉中生の皆さん。自分の進路や将来と共に、ご家族の未来について考えることは、君たちが大人に成長するために、とても大切なことだと私は考えます。

義母の人生は義母の人生。自分が過ごしやすいのがいいに決まっています。

そこに「住んであげている」という施しの感情だけは、絶対にあってはならない。

お互いの気持ちを尊重して、労わり合って、理解して、協力しあう家族でありたい。

そうなるためには、お互いに、それ相応の努力が必要だと思うのです。

思っていることを隠さず言い合えばいいなんていう簡単な話ではないのです。